

前々稿錯誤 —— ルイス・マンフォードの見解をサマーセツト・モームのそれとみなす —— 訂正が、前稿の課題であった。モービー・ディックとエイハブ船長、おのおのを善悪いずれに配するにせよ、そのようなアレゴリーじみたかなる解釈をも越えた、あるいは意に介せぬ竟位にモームは位置する。「そこにどのような寓意ないしは象徴が託されていようといまいと、そんなことには少しも煩わされなくて読むことが…できるのは幸いである」という。このような立脚点からすれば、他の偉大な小説と作者の場合とは全く逆に、副次的な諸資料からその生活、環境を知る以上に『モービー・ディック』そのものから納得のいく、メルビルそのひととなりについて明確な印象が得られるという。その印象を整理し、前稿末尾に提示したものを、論述進捗上煩を厭わず、以下に再録する。確認されたこととしてつけ加えておけば、これは小説『モービー・ディック』そのものの構制でもあった。

天賦の才 (+) / 悪霊 (-)

すばらしい花 (+) / 枯らして (-)

近づくまい (+) / 本能 (-)

友情 (+) / 空なるもの (-)

心やさしい(+)/ 白眼視(-)

さて、『モービー・ディック』がこのようにとり挙げられたのは、これも前々稿のこととなるが、ウェンディ・ドニジャーの言葉、「レヴィ＝ストロースにとってパラドクスは、エイハブ船長のクジラなのだ」に由来する。レヴィ＝ストロースとは、神話が「解決できないパラドクスを解決しようとする執念とも言える欲求によって駆り立てられているのだ」ということをわれわれに教えてくれた人」なのであった。また、こうもいわれた。

神話はすべて、自然が与える混沌たる事実¹に知的意味を与えようとする弁証法の試みであるとし、またこの試みは、不可避的に人間の想像力を二項対立の網にとらえてしまう…。

ドニジャーが「エイハブ船長のクジラ」としてみようとする神話のパラドクス、二項対立の網は、モームが『モービー・ディック』にみるメルビル、そのひととなり、したがって、うえに提示した記号論的な構造に重ね合わされている。これも論述進捗上つけ加えておかねばならないことだが、「+/-」のこの構造は構制を横列状にも縦列状にもなしている。

『神話と意味』は、レヴィ＝ストロースがドニジャー提出の問いに逐次答えるというかたちで五講より構成されている。その最終講「神話と音楽」には、ここまでに確認されてきたこととが、その準備でもあるかのように興味深い論述が展開されている。レヴィ＝ストロースがいうには、「神話」と「音楽」をつなぐ「と」には二つの側面——「類似関係」と「隣接関係」がある。最初に気づいたといわれる「類似」の側面から確認してみよう。

…神話は音楽の総譜とまったく同様、一つの連続的シークエンスとして理解することは不可能だというのが私の主要な論点です。小説や新聞記事を読むように、一行一行、左から右へ読もうとしたのでは、神話は理解ができないと気づかねばなりません。神話は一つの全体的まとまりとし

て把握しなければならないのです。また、神話の基本的な意味は、ひとつづきに連なるできごとによって表されているのではなくて、いわば「できごとの束」によって表されていること、しかもそれらのできごとは物語別々の時期に起こったりもするをはつきりさせる必要があります。したがって神話は、多かれ少なかれ、オーケストラの総譜と同じような読み方をしなければなりません。^{*}

総譜の、たとえば任意の一頁をとり上げてみる。その一段一段ではなく頁全体を把握することが必要である。頁の上の第一段に書かれていることが、それより下の第二段、第三段などに書かれていることの一部だと考えてはじめて意味をもちうる。そして、このことは各頁、さらには当然、頁全体つまり総譜についても…。だから、いわれる。

つまり、左から右へ読むだけではなくて、同時に垂直に、上から下にも読まねばならないのです。^{**}

モームは、まさしく『モービー・ディック』にメルビルのひととなりをこのように透視していたのだ。それを記号論的な構造(+/-)として上に提示したが、そこには、つけ加えたように、「+/-」は横列状にも縦列状にも構制をなしていた。だからこそ、ドニジャーは「エイハブ船長のクジラ」にレヴィ＝ストロースのパラドクスをみた。

「と」のいまひとつの側面、「隣接関係」についてみることにしよう。「どのようにして、またなぜ、こういう事態になるのでしょうか」という問いかけとともに論述はすすむ。神話との類似関係におかれた音楽だが、「どの種類の音楽にもあてはまるわけではありません」ということばからもうかがえるように、ある特定のジャンルの音楽様式が想定されていた。十七世紀はじめのフレスコバルディや十八世紀はじめのバッハとともに西欧文明に現れた音楽、十八・十九世紀のモーツァルト、ベートーヴェン、ワグナーによって花開くにいたった音楽であるという。

このジャンルの音楽形式の胚胎そして開花の事実、それ自体きわめて意味深いことがらではあるが、レヴィ＝ストロースがその慧眼を凝らすのはその背後に隠れてあるものなのだ。

…これまでになかった十七世紀の、そしてとくに十八・十九世紀の、新しい重要な音楽様式が出現したのです。^{***}すでに確認のところだ。ところが、その直前にはつぎの事態が出来していた。

…神話のモデルによって作られていた「物語」に代わる最初の「小説」が登場したのは、神話的思考が——消滅したとは申しませんが——ルネサンスと十七世紀の西洋的思考の背後にかくれたころのことでした。^{****}

モームが『モービー・ディック』をその十大のひとつとしてあげる「小説」の登場、ルネサンスと十七世紀の西洋思考、そしてそれらと神話的思考との関係、さらにはその直後に芽吹き、花開くうえにみる音楽とのそれについては次稿のこととする。

^{*} レヴィ＝ストロース『神話と意味』、みすず書房、1999、p.62～p.63。

^{**} 同 p.63。

^{***} 同 p.64。

^{****} 同 p.63。